

アムスルだより

No. 57 2002年 9月10日

Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所



〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

ホームページもご覧下さい。http://www.amsl.or.jp

TEL:098-987-2304 FAX:098-987-2875 E-mail:amsl@ryukyu.ne.jp



二つの特技を持つカニ

カラッパの仲間

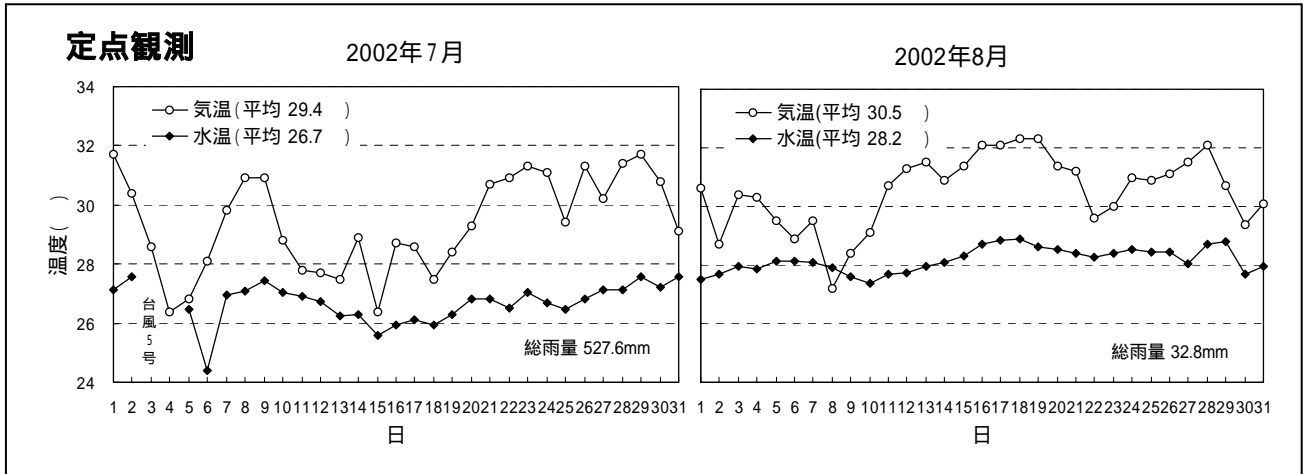
「青い海と白い砂」というと、いかにも南の島のイメージです。砂が白いのは、ホシズナの仲間やサンゴ、貝たちのつくる炭酸カルシウムが、その材料となっているからで、阿嘉島の海でもサンゴのすむ岩場のまわりには、美しい砂地の海底が広がっています。けれど、その砂地には意外に生き物は少なく、魚たちが群れているのも、砂地につき出たサンゴのはえた岩場のまわりだけです。とはいっても、よく見ると、砂地にもおもしろい生き物が色々すんでいます。今回は、その中から、カラッパというカニの仲間を紹介しましょう。

カラッパの体つきは、一度見たら忘れられないくらい、愛きょうたっぷりです。幅の広い左右のはさみを口の前で閉じると、丸い甲らとぴったりと合わさり、その姿は、まるで横長のまんじゅうのようです。はさみと甲らが、きちんと閉じら

れるからでしょう、英語ではカラッパのことを“箱のようなカニ（ボックス・クラブ）”と言います。また、その様子が顔をかくしているように見えるので“はずかしがり屋のカニ（シェイムフェイスド・クラブ）”と呼ぶこともあるようです（ちなみに、この「カラッパ」という名前は、正式な生物学の学名をそのままカタカナにしたものなのですが、もともとは“ヤシの実”という意味です）。

とてもかわいい形のカニですが、いつもその姿を見ることができません。ふだんは砂にもぐり、目だけを出しているからです。

カラッパの特技の1つは、この「砂もぐり」です。では、どうやってもぐるのでしょうか。今、研究所にはソデカラッパというカラッパがいて、ためしに砂の上のにせてみました。すると、歩くための脚（歩脚といいますが）をさかんに動かして砂をほり、体の後ろ側をどんどん砂にすずめていきます。それと同時に大きなはさみをブルドーザーのように使って、体のまわりの砂を前に押し出し、すき間をつくっています。そして、はさみをちぢめると同時に、そのできたすき間に体をもぐり込ませました。実際には、これは1~2秒間のできごとで、それをくり返して砂にもぐっていきます。計ってみると、甲らの幅が6.5cmあるソデカラッパ



が、7秒ですっかり砂にもぐってしまいました。もう長い目が2つ砂から出ているだけです。おまけにちょっとおどかすと、この目すら砂の中にちぢめてしまうので、外からはまったく見えなくなります。カラッパは、敵から身を守っているために、このすばやい砂もぐりの技を身につけたのでしょう。

カラッパの2つ目の特技は、「貝割り」です。カラッパの右のはさみには、2つの出っぱりがあり(図1)、これをちょうど缶切りのようにつかって、巻き貝の殻をバキバキと割っていくのです。巻き貝の殻も身を守るためにかたくできていますが、カラッパにかかると役に立たず、サザエなどの巻き貝はもちろん、そのからをすみかにするヤドカリなども食べられてしまいます。



カラッパは、そのかわいらしい姿を見ると、のんびりと暮らしているように思えますが、実際には、砂地の海底で、この2つの特技をつかってたくましく生きているのです。

阿嘉島の海より

- オニヒトデ駆除 -

最近、新聞やテレビで沖縄本島や慶良間諸島一帯でのオニヒトデ異常発生ニュースをよく目にします。オニヒトデは15~16本の足と体中に毒のあるトゲを持つ大型のヒトデで、見るからに凶悪な姿をして



います。このオニヒトデは普段サンゴを食べて生きています。ですから、オニヒトデが異常発生すると辺り一面のサンゴを食べ尽くしてしまい、サンゴが全滅してしまう恐れもあります。世界有数の美しさを誇る慶良間のサンゴ礁にとっては一大事です。座間味村内では昨年からはダイビング協会が中心となってボランティアでオニヒトデの駆除にあたってきましたが、オニヒトデの数が多すぎてなかなか状況はよくなりません。そこで沖縄県としても今年の7月にオニヒトデ緊急対策会議を設置し、この事態に対応することになりました。今後、本島の恩納村近海や慶良間全域にわたってオニヒトデの調査がおこなわれ、駆除のための予算が配分されることになるでしょう。調査および駆除事業の際には地元ダイバーのみなさんの協力が不可欠です。その時はよろしくお願いします。